会報
Vol.17　No.2　通巻 99　　発行日 2015.3.8.

Der Wind
（風）

湘南日独協会
Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan
事務局：〒251-0025 藤沢市鵠沼石上1－1－1
江ノ電第２ビル 7F
TEL：0466－26－3028　FAX：0466—27—5091
E-mail：jdgs@jcom.home.ne　http://jdg-shonan.ciao.jp/

松野義明新会長のご挨拶

1 月 25 日開催された、第 16 回湘南日独協会定時総会において松野義明氏が会長に就任がされました。総会内容は次頁に掲載されております。

松野義明会長

2015 年 1 月 25 日の湘南日独協会総会で会長を拝命いたしました松野義明でございます。初代会長の岩崎英二郎先生、第二代会長の織田正雄氏が立派なレールを敷いて下さっておりますので、そのレールがますます輝くよう努力する所存でございます。

湘南日独協会は、1998 年 11 月 14 日に設立総会を執り行い、神奈川県で初の日独協会として発足いたしました。発足以来の 16 余年間、会員の皆様のご理解とご支援のおかげで、活動の幅を広げて参りました。当協会は財団法人日独協会連合会の 48 番目の日独協会として設立されましたが、設立当初からドイツ・ワイマール市独日協会と友好協定を結び相互に訪問し親善をはかってきております。

昨今、世界の国々の間では、良好な国際関係の構築がますます重要性を増してきております。幸いなことに、日本とドイツは常に良好な関係で結ばれてきており、2011 年には日独修好 150 周年を迎えました。民間ベースでの交流を通しての相互理解もますます深まっているところであります。文学、芸術、医学、自然科学、一般技術（特に、環境保全技術、エネルギー生産技術）などの分野でも相互的によい影響を与え合い、深い信頼感に支えられた理想的な関係が構築されております。

会員の皆様のご協力を得ながら、今後とも更なる日独友好の推進をはかるべく、様々な企画を考えていきたいと考えております。ご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げま

湘南日独協会の行事予定

■3 月例会　講演会
「ドイツに渡った日本文化」
文学だけではなく、茶道・華道・歌舞伎等の伝統文化、アニメ等の現代文化、更には大学の日本学についてもお話頂く予定です。
講師　慶應義塾大学名誉教授文学博士
　　寺澤行忠氏
日時　3 月 22 日（日）　14:00~15:30
会場　湘南アカデミア（江ノ電第 2 ビル7F）
会費　1,000 円
後援終了後懇親会（別料金）を予定しています

■Singen Wir Zusammen 歌で楽しむドイツ語第 27 回
テーマ「Frühling－春」
日時　3 月 15 日（日）　15:00～16:30
会場　藤沢商工会議所ミナパーク
会費　1,000 円

■Schwatzerei am Stamtisch　第 8 回
テーマ　「Frezeit-余暇」」
日時 3 月 24 日（火）　15:00～16:30
会場　藤沢商工会議所ミナパーク
会費　1,000 円

■4 月例会　ケンペル・バーニー祭（箱根）へ参加
ドイツ人植物学者、1600年代に日本滞在し、「日本誌」を著し欧州に日本を紹介したケンペル、と箱根を愛したイギリス人バーニーを讃える祭への参加です。
日時　4 月 12 日（日）　雨天決行
会費　式典、昼食会等を含めて 2,000 円（但し往復の交通費は別料金（詳細は次頁）

新入会員紹介　　敬称略
寺澤　行忠

—前頁よりの続き—

湘南日独協会の活動予定

4月12日ケンペル・バーニー祭参加について

8:40 JR小田原駅改札口集合

(藤沢発 7:49 大船発 7:44 横浜発 7:28)

9:00 伊豆箱根バス(ポールNo.5)小田原発

9:49 元箱根着 徒歩数分で会場

10:30 会場興福寺で式典

12:00 昼食と講話

13:00 箱根神社で宝物殿見学と散策

15:00 頃解散

16:30 頃小田原で懇親会(別料金)

詳細照会は勝亦理事へお願いします。
会員の関口氏、中村氏にお世話頂きます。

■Singen wir zusammen 歌で楽しむドイツ語第28回

日時 4月13日(月) 15:00～16:30

テーマ「Wanderung」

会場 藤沢商工会議所ミナパーク
会費 1,000円

■全国日独協会連合会総会

4月17日(金)～18日(土)
今年はいわき市で開催され、松野会長、三谷副会長大久保理事が参加の予定です

■Schwatzerei am Stammtisch 第9回

テーマ 未定

日時4月21日(火) 15:00～17:00

会場 藤沢商工会議所ミナパーク

会費 1,000円

■Singen wir zusammen 歌で楽しむドイツ語第29回

日時 5月17日(月) 15:00～16:30

会場 藤沢商工会議所ミナパーク

会費 1,000円

■5月例会 講演会

「地球環境について」

講師 東北大学名誉教授 川崎 健氏

日時 5月31日(日) 14:30～16:00

会場 湘南アカデミア(江ノ電第2ビル7F)

会費 1,000円

講演会終了後懇親会(別会費)を予定しています

第16回湘南日独協会定時総会報告

1月26日(日)13時湘南アカデミアで開催された定時総会の要点をご報告致します。

○2014年活動報告

・例会は4月に「ドイツ菓子の会」を臨時に開催し通年で13回開催。特に11月のワイマール独日協会一行を迎えての交流会はフォン・ヴェアテルン大使ご夫妻を迎えて盛会に行われた。

・歌で楽しむドイツ語(SWZ)年間10回開催
参加者も増え、大きな部屋を予約が必要な状況。

・ドイツ人とのおしゃべりの会(SAS)は 6 月から開催5回開催、Familie,Freizeit,Umwelt 等のテーマが取り上げられた。

・国際交流イベント(鎌倉市・藤沢市)へ参加。

・ドイツ語講座は4コースを開設、協会の中核事業のひとつとして定着。

・合唱団アムゼルの支援、会報(Der Wind)の隔月発行、ホームページの運営。

○会則の変更と新役員人事

会則第3章第9条役員に新たに「相談役」を加えた。即日発効。

<u>新役員体制</u>

相談役 岩崎英二郎 名誉会長 織田正雄

会長 松野義明 副会長 三谷喜朗

副会長 伊藤志津子

顧問 大石則忠 顧問 古橋昭子

顧問 西山忠壬

新任理事 宮川新平 鬼久保洋治 小野宏子
(他は変わらず)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

■6月例会 ビールの話を聞き飲んで楽しむ会

講師 イエナ社友田圭治社長

日時 6月28日(日)14:00～17:30

会場 音楽酒場"BOTCHY BOTCHY"
茅ヶ崎駅より徒歩5分

詳細は次号でお知らせ致しますが、参加者の演奏歓迎です。アイデアを勝亦理事までお知らせご相談下さい。

2015年度　収支予算　（単位千円）

収入	2014年度決算	2015年度予算
前期繰越	778	368
入会金・年会費	385	390
寄付金	10	0
例会	954	1,000
ドイツ語講座	2,131	2,100
SWZ ・SAS	173	180
事業費 注	476	0
合計	4,907	4,038
支出		
会報作成	113	120
事務局費	183	200
事務用品	83	100
通信費	119	120
事業費　注	964	0
例会	933	1,000
ドイツ語講座	1,930	1,950
SWZ・SAS	104	110
合唱団育成費	15	15
その他	95	40
合計	4,539	3,655
差引余剰金	368	383

注　ワイマール独日協会歓迎会関連

会費納入のお願い

2015 年の会費を納入頂きたく用紙を同封しています。4 月 20 日までに願い致します。念の為、金額と口座番号を記載しております

年会費　3,000 円

口座番号　00210－9－22718

口座名　湘南日独協会

なお、お振込の際、お名前ご住所をお忘れなくご記入ご確認をお願い致します。

ドイツ語講座 2015 年春夏期受講生募集

テキスト

初級 1　　Schritte International 1

初級 2　　Schritte International 2

中級　　Schritte International 4

講師　　中川純子　　Arndt-Oraf Friess

時間と場所　初級 1　13：25～14：55(土)　藤沢商工会館

　　初級 2　11：40～13：10(土)　5 階会議室

　　中級　11；00～11：30（土）

☆　☆　☆

原書講読　テキスト　Hermann Hesse

講師　松野義明　10:00～11:30　藤沢商工会議所 5 階

受講料　46,000 円（20 回　各クラス共通）

☆　☆　☆

なお、湘南日独協会会員には 5,000 円の割引特典があります

詳細は同封のチラシをご参照下さい。

『ドイツ語講座の受講生と講師と関係者の新年懇親交流会が 1 月 24 日開催されました』

編集後記

○湘南日独協会の会報は、次号が 100 号に当たります。協会の創立は 1998 年 11 月、20 周年の祝賀も遠くありません。そろそろ準備に入らなければなりません。皆さんのアイデアとご協力で素晴らしい記念日を迎えたいと思います。

○今回は 8 頁となりました。ドイツ語講座の皆さんの労作を是非お読みください。次号に後半を掲載しますが、その後は他の作品が準備されています。講座へ皆さんの参加をお待ちしています。　（大久保）

寄稿

翻譯「赤毛の猫」添え書き

2011 年 10 月から始まったドイツ語講座「入門コース」で文法を半年間（20 回）勉強した後に最初に読んだのがルイーゼ・リンザー（1911-2002）の短編の一つである“Die rote Katze”でした。以来、作家の意図を正確に読み取ることを目指して、いくつかの短編を読んできましたが、まず、講座参加者の皆様が最初に手掛けた苦心の翻訳に対して会員の皆様のご講評を頂きたく“Der Wind”に掲載させていただくことになりました。　（注：紙面の編集上、3 月会報に前半 5 月会報に後半を掲載致します）

現在は、かつての「入門コース」を「原書講読コース」と名称を変え、ヘルマン・ヘッセの短編 “Augustus” に挑戦しています。（松野）

松野講師と翻訳の皆さん

Die Rote Katze　赤毛の猫

Luise Rinser　ルイーゼ・リンザー

1948

翻訳

山崎　正（翻訳総括）　小田 武司

御木　理恵　　森長 京子

Ich muß immer an diesen roten Teufel von einer Katze denken, und ich weiß nicht, ob das richtig war, was ich getan hab. Es hat damit angefangen, daß ich auf dem Steinhaufen neben dem Bombentrichter in unserm Garten saß. Der Steinhaufen ist die größere Hälfte von unserm Haus. Die kleinere steht noch, und da wohnen wir, ich und die Mutter und Peter und Leni, das sind meine kleinen Geschwister. Also, ich sitz da auf den Steinen, da wächst überall schon Gras und Brennesseln und anderes Grünes. Ich halt ein Stück Brot in der Hand, das ist schon hart, aber meine Mutter sagt, altes Brot ist gesünder als frisches. In Wirklichkeit ist es deswegen, weil sie meint, am alten Brot muß man länger kauen und dann wird man von weniger satt. Bei mir stimmt das nicht.

Plötzlich fällt mir ein Brocken herunter. Ich bück mich, aber im nämlichen Augenblick fährt eine rote Pfote aus den Brennesseln und angelt sich das Brot. Ich hab nur dumm schauen können, so schnell ist es gegangen. Und da seh ich, daß in den Brennesseln eine Katze hockt, rot wie ein Fuchs und ganz mager.

僕は今でも、悪魔のような赤毛の猫のことが頭から離れない。僕がしてしまったことが、本当に正しかったのかどうか分からないからだ。僕の家の庭には空襲でできたすり鉢状の穴があるが、この物語は、その脇に積み上げた瓦礫の山の上に僕が腰を下ろしていたときから始まる。この瓦礫の山は、僕達の家の半分以上が崩れたもので、わずかに崩れずに残った部分に僕と母と弟のピーターと妹のレニーが住んでいたのだ。その瓦礫の山に腰を下ろしていたら、そこら中が一面イラクサなどのいろんな雑草が生い茂っていた。その時、僕はとっくに固くなったパンの一切れを手に持っていた。母は古いパンの方が新しいのより体に良いといつも云っていた。古いパンは固いから長いこと噛まなければならないので、少しの量で満腹するのだと、母は本気で信じていたのだが、僕にはそれは本当とは思えなかった。僕は持っていたパンのかけらをうっかり落としてしまった。身をかがめて拾おうとした瞬間、イラクサの中で赤毛の動物の足が動いた。パンをかっさらったのだ。それはとてもすばやかったので、僕はただ呆気にとられて見ているほかなかった。そして、僕はイラクサの中に、狐のように赤くてひどく痩せこけた一匹の猫がうずくまっているのを見つけた。

„Verdammtes Biest", sag ich und werf einen Stein nach ihr. Ich hab sie gar nicht treffen wollen, nur verscheuchen. Aber ich muß sie doch getroffen haben, denn sie hat geschrien, nur ein einziges Mal, aber so wie ein Kind. Fortgelaufen ist sie nicht. Da hat es mir leid getan, daß ich nach ihr geworfen hab, und ich hab sie gelockt. Aber sie ist nicht aus den Nesseln rausgegangen. Sie hat ganz schnell geatmet. Ich hab gesehen, wie ihr rotes Fell über dem Bauch auf und ab gegangen ist. Sie hat mich immerfort angeschaut mit ihren grünen Augen. Da hab ich sie gefragt: „Was willst du eigentlich?" Das war verrückt, denn sie ist doch kein Mensch, mit dem man reden kann. Dann bin ich ärgerlich geworden über sie und auch über mich, und ich hab einfach nicht mehr hingeschaut und hab ganz schnell mein Brot hinuntergewürgt. Den letzten Bissen, das war noch ein großes Stück, den hab ich ihr hingeworfen und bin ganz zornig fortgegangen.

Im Vorgarten, da waren Peter und Leni und haben Bohnen geschnitten. Sie haben sich die grünen Bohnen in den Mund gestopft, daß es nur so geknirscht hat, und Leni hat ganz leise gefragt, ob ich nicht noch ein Stückchen Brot hab. „Na", hab ich gesagt, „du hast doch genau so ein großes Stück bekommen wie ich und du bist erst neun, und ich bin dreizehn. Größere brauchen mehr." — „Ja", hat sie gesagt, sonst nichts. Da hat Peter gesagt: „Weil sie ihr Brot doch der Katze gegeben hat." „Was für einer Katze?" hab ich gefragt. „Ach", sagt Leni, „da ist so eine Katze gekommen, eine rote, wie so ein kleiner Fuchs und so schrecklich mager. Die hat mich immer angeschaut, wie ich mein Brot hab essen wollen." – „Dummkopf", hab ich ärgerlich gesagt, „wo wir doch selber nichts zu essen haben. " „Aber sie hat nur mit den Achseln gezuckt und ganz schnell zu Peter hingeschaut, der hat einen roten Kopf gehabt, und ich bin sicher, er hat sein Brot auch der Katze gegeben. Da bin ich wirklich ärgerlich gewesen und hab ganz schnell weggehen müssen.

Wie ich auf die Hauptstraße komm, steht da ein amerikanisches Auto, so ein großer langer Wagen, ein Buick, glaub ich, und da fragt mich der Fahrer nach dem Rathaus. Auf englisch hat er gefragt, und ich

僕は「こん畜生」と云って、猫をめがけて石を投げつけた。僕は猫に当てるつもりは全くなく、ただ追い払おうと思ったのだが、猫に当たってしまったようだ。猫が人間の子供のような声で一度だけ鳴き声をあげたからだ。でも、猫は逃げ去らなかった。僕は石を投げつけて可哀相なことをしたと思い、誘い出そうとしたが、猫はイラクサの中から出てこなかった。猫はものすごくあらい息づかいをしていた。僕は猫のおなかの赤い毛が上下に動いているのを見た。猫は緑色の目で僕をじっと睨んでいた。そこで、僕は「お前は一体何が欲しいんだい？」と問いかけた。人間でもないものと、話をするなんて気違い沙汰だ。そこで、僕は猫と自分自身に腹が立った、そして目をそらせて、素早くパンを呑み込んだ。それから、最後のかなり大きなパンの塊を腹立ちまぎれに、猫に投げつけて、その場を立ち去った。

家の前の庭では、ピーターとレニーが、豆をもぎ取りながら緑のサヤインゲンを口に入れ、ただギシギシと音を立てていた。そしてレニーはか弱い声で僕がまだパンのかけらを持っているかどうか尋ねた。「いゝや」と僕は云った。「お前は僕とちょうど同じ位の大きさのパンをもらっただろう。お前はまだ九歳、僕は十三歳だ。大きな子はもっとパンが必要なんだよ」と。彼女は「そうね」と云ったが、そのくせそれ以上は何も云わなかった。ペーターは「レニーは自分のパンを猫にやっちゃったんだよ」と云った。「どんな猫に？」と僕は尋ねた。「あのね、赤い子狐のようなひどく痩せた猫が来て、私がパンを食べようとしているところをずっと見ていたの」とレニーは云った。「馬鹿だなあ、僕たちだって自分が食べるものがどこにもないというのに」と僕は怒って云った。しかし、彼女はただ肩をすくめるだけで、ちらっとペーターの方に目を向けた、彼の顔が赤くなったので、僕は彼も猫に自分のパンを与えたのに違いないと思った。そして、僕は本当に腹が立って、すぐさま、その場を立ち去らずにはいられなかった。

僕が目抜き通りに来たとき、そこに、ビュイックだと思うが、大きな車体の長いアメリカの車が停っており、運転していた人が僕に市役所へ行く道を尋ねた。

Auf englisch hat er gefragt„The next street", hab ich gesagt, „and then left and then" — geradeaus hab ich nicht gewußt auf Englisch, das hab ich mit dem Arm gezeigt, und er hat mich schon verstanden, — „And behind the church is the market place with the Rathaus." Ich glaub, das war ein ganz gutes Amerikanisch, und die Frau im Auto hat mir ein paar Schnitten Weißbrot gegeben, ganz weißes, und wie ich's aufklapp, ist Wurst dazwischen, ganz dick. Da bin ich gleich heim gerannt mit dem Brot. Wie ich in die Küche komm, da verstecken die zwei Kleinen schnell, was unterm Sofa, aber ich hab es doch gesehen. Es ist die rote Katze gewesen. Und auf dem Boden war ein bißchen Milch verschüttet, und da hab ich alles gewußt. „Ihr seid wohl verrückt", hab ich geschrien, „wo wir doch nur einen halben Liter Magermilch haben im Tag, für vier Personen." Und ich hab die Katze unterm Sofa herausgezogen und hab sie zum Fenster hinaus geworfen. Die beiden Kleinen haben kein Wort gesagt. Dann hab ich das amerikanische Weißbrot in vier Teile geschnitten und den Teil für die Mutter im Küchenschrank versteckt.

„Woher hast du das?" haben sie gefragt und ganz ängstlich geschaut. „Gestohlen", hab ich gesagt und bin hinausgegangen. Ich hab nur schnell nachsehn wollen, ob auf der Straße keine Kohlen liegen, weil nämlich ein Kohlenauto vorbeigefahren war, und die verlieren manchmal was. Da sitzt im Vorgarten die rote Katze und schaut so an mir rauf. „Geh weg", hab ich gesagt und mit dem Fuß nach ihr gestoßen.

Aber sie ist nicht weggegangen. Sie hat bloß ihr kleines Maul aufgemacht und gesagt: „Miau." Sie hat nicht geschrien wie andere Katzen, sie hat es einfach so gesagt, ich kann das nicht erklären. Dabei hat sie mich ganz starr angeschaut mit den grünen Augen. Da hab ich ihr voll Zorn einen Brocken von dem amerikanischen Weißbrot hingeworfen. Nachher hat's mich gereut.

Wie ich auf die Straße komm, da sind schon zwei andere da, Größere, die haben die Kohlen aufgehoben. Da bin ich einfach vorbeigegangen. Sie haben einen ganzen Eimer voll gehabt. Ich hab

彼は英語で尋ねた。僕はほんの少し英語ができたので、「次の通りを、左に、それから・・・」〈真直に〉という言葉を英語でどう云ったらいいのかわからなかったので、手で方向を示した。それで彼はすぐに分かったようだった。「それからね、教会のうしろに、市役所に面したマーケットの広場があります」と、これはちゃんとした英語で話したつもりだ。そうしたら、車の中の女の人が真っ白なパンを数切れくれた。僕がそれを開いたら、その間にすごく厚いソーセージが挟まっていた。そこで、僕はすぐにもらったパンをもって我が家へと走った。

僕が台所に入ったとき、チビ達二人して素速く何かをソファーの下に隠したが、僕にはそれはすぐにわかった。それはあの赤い猫だ。そして床の上には少しミルクがこぼれていたので、それで僕には、すぐに分かった。「お前たちは気でも狂ったのか、家族四人のために、一日たった半リットルの脱脂乳しかないというのに…」と僕は大声を張り上げた。そして、ソファーの下の猫を引張り出して、窓から外に放り出した。弟と妹は黙っていた。それから僕はアメリカの白パンを四等分して、母の分を台所の戸棚に隠した。

「何処で手に入れたの？」と彼等は尋ね、とても心配そうな表情をした。「盗んだのさ。」と僕は云って、すぐに外へ飛び出した。石炭を積んだ自動車が通りすぎたので、道路に石炭が落ちていないかどうか、急いで探そうと思ったのだ。自動車がときどき石炭を落していったからだ。前庭にはあの赤毛の猫がうずくまって、いつものように、僕をにらんでいた。「あっちへ行け。」と僕は云って、猫を足でけとばしてやった。

けれども猫は逃げずに、小さな口をあけて「ニャオ」と云った。他の猫のように悲鳴をあげないで、ただ「ニャオ」とだけ云ったのは何故なのか僕には説明できない。猫は僕を緑色の目でひたむきに見つめていた。それで僕はとても苛立って、腹立ちまぎれにアメリカの白いパンのかけらを猫に投げつけてやった。そのことを後で後悔したけれど…。僕が通りに出たとき、僕より年かさの二人の先客がすでにいて、石炭を拾っていた。僕はそこを何食わぬ顔で通りすぎたが、彼等はバケツ一杯の石炭を拾ったのだ。僕は素速くその中に唾を吐

schnell hineingespuckt. Wär das mit der Katze nicht gewesen, hätte ich sie alle allein gekriegt. Und wir hatten ein ganzes Abendessen damit kochen können. Es waren so schöne glänzende Dinger. Nachher hab ich dafür einen Wagen mit Frühkartoffeln getroffen, da bin ich ein bißchen drangestoßen, und da sind ein paar runtergekollert und noch ein paar. Ich hab sie in die Taschen gesteckt und in die Mütze. Wie der Fuhrmann umgeschaut hat, hab ich gesagt: „Sie verlieren Ihre Kartoffeln." Dann bin ich schnell heimgegangen. Die Mutter war allein daheim, und auf ihrem Schoß, da war die rote Katze. „Himmeldonnerwetter", hab ich gesagt, „ist das Biest schon wieder da?" — „Red doch nicht so grob", hat die Mutter gesagt, „das ist eine herrenlose Katze, und wer weiß, wie lange sie nichts mehr gefressen hat. Schau nur, wie mager sie ist." — „Wir sind auch mager", hab ich gesagt. „Ich hab ihr ein bißchen was von meinem Brot gegeben", hat sie gesagt und mich schief angeschaut. Ich hab an unsere Brote gedacht und an die Milch und an das Weißbrot, aber gesagt hab ich nichts. Dann haben wir die Kartoffeln gekocht, und die Mutter war froh. Aber woher ich sie hab, hat sie nicht gefragt. Meinetwegen hätte sie schon fragen können. Nachher hat die Mutter ihren Kaffee schwarz getrunken, und sie haben alle zugeschaut, wie das rote Biest die Milch ausgesoffen hat. Dann ist sie endlich durchs Fenster hinausgesprungen. Ich hab schnell zugemacht und richtig aufgeatmet. Am Morgen, um sechs, hab ich mich für Gemüse angestellt. Wie ich um acht Uhr heimkomm, sitzen die Kleinen beim Frühstück, und auf dem Stuhl dazwischen hockt das Vieh und frißt ein geweichtes Brot aus Lenis Untertasse. Nach ein paar Minuten kommt die Mutter zurück, die ist seit halb sechs beim Metzger angestanden. Die Katze springt gleich zu ihr hin, und wie die Mutter denkt, ich geb nicht acht, läßt sie ein Stück Wurst fallen.— Es war zwar markenfreie Wurst, so graues Zeug, aber wir hätten sie uns auch gern aufs Brot gestrichen, das hätte Mutter doch wissen müssen. Ich verschluck meinen Zorn, nehm die Mütze und geh. Ich hab das alte Rad aus dem Keller geholt und bin vor die Stadt gefahren. Da ist ein Teich, in dem gibts Fische. Ich hab keine Angel, nur so einen Stecken mit zwei spitzen Nägeln drin, mit dem stech ich nach den Fischen. Ich hab schon oft Glück gehabt und diesmal auch. Es ist noch nicht zehn Uhr, da hab ich zwei ganz nette Dinger, genug für ein Mittagessen. Ich fahr heim, so schnell ich kann, und daheim leg ich die Fische auf den Küchentisch. Ich geh nur rasch in den Keller und sags der Mutter, die hat

吐きかけてやった。もし、猫さわぎがなかったなら、僕は全部一人占めにできて、それでまるまる夕飯の準備ができただろうに。その石炭は黒光りしていてそれは素晴らしい代物だった。僕は、その代りに、早どりのジャガイモを積んだ馬車に出食わした。ちょっとつついてみると、二つ三つのじゃがいもがころがり落ちた。更になお二つ三つ落ちてきた。僕はポケットと帽子につめこんだ。御者の小父さんが振り向いたので、「ジャガイモが落ちましたよ」と云って、急いで家に帰った。母は一人で家にいた。そして、彼女の膝の上に赤い猫が座っていた。「なんてことだ、こん畜生、また来やがったのか」と云った。「そんな乱暴な口をきくものじゃありませんよ、これは飼い主を失くした猫なのよ、どんなに長いこと何も食べてないか知れたもんじゃない。一寸見てごらんよ、どんなに痩せているか」と母は云った。「僕達だって痩せているさ」僕は口答えした。母は「私は猫に私の分のパンをほんの少しやったのよ」と云い、伏目がちに僕を見つめた。僕は自分達のパンのこと、牛乳のことそして白パンのことに思いを馳せたが、一言も口に出さなかった。それから、僕達はジャガイモを料理して、母は機嫌が良くなった。それでも、それをどこから手に入れたか、母は尋ねてくれなかった。僕としては、聞いてくれても良かったのに。それから母はコーヒーをブラックで飲み、そして子供達はあの赤毛の嫌な奴が、ミルクを飲み干す様子を一部始終見守った。それから猫はやっとのことで窓から飛び出していった。僕は急いで窓を閉め、ほっと一息ついた。朝六時に、僕は野菜を買うための行列に並んだ。八時に家に戻ったとき、弟や妹は朝食をとっており、この二人の間の椅子の上に、猫がうずくまって、レニーの皿からミルクで軟かくしたパンを食べていた。二、三分後に、母が戻ってきた。彼女は五時半から、肉屋で行列に並んだのだ。猫は彼女のところに直ぐ跳んでいき、母は僕が気が付かないと思って、ソーセージのかけらをわざと猫のために落してやった。それはたしかに闇市のソーセージで、得体の知れない灰色の代物だったが、僕達は喜んでパンに塗って食べたのを母は知っていた筈なのに…。僕は怒りをこらえ、帽子をつかんで出かけた。僕は地下室から古ぼけた自転車を取り出して、街の外に出かけた。そこには、魚のいる池があった。僕は釣竿を持ってはいなかったが、二本の尖った釘のつている棒を持っており、それでもって魚を刺して取るのだ。僕は今まで、しばしば幸運に恵まれたが、今回もまたそうであった。

hab keine Angel, nur so einen Stecken mit zwei spitzen Nägeln drin, mit dem stech ich nach den Fischen. Ich hab schon oft Glück gehabt und diesmal auch. Es ist noch nicht zehn Uhr, da hab ich zwei ganz nette Dinger, genug für ein Mittagessen. Ich fahr heim, so schnell ich kann, und daheim leg ich die Fische auf den Küchentisch. Ich geh nur rasch in den Keller und sags der Mutter, die hat Waschtag. Sie kommt auch gleich mit herauf. Aber da ist nur mehr ein Fisch da und ausgerechnet der kleinere. Und auf dem Fensterbrett, da sitzt der rote Teufel und frißt den letzten Bissen. Da krieg ich aber die Wut und werf ein Stück Holz nach ihr, und ich treff sie auch. Sie kollert vom Fensterbrett, und ich hör sie wie einen Sack im Garten aufplumpsen. „So", sag ich, „die hat genug." Aber da krieg ich von der Mutter eine Ohrfeige, daß es nur so klatscht. Ich bin dreizehn und hab sicher seit fünf Jahren keine mehr gekriegt. „Tierquäler", schreit die Mutter und ist ganz blaß vor Zorn über mich. Ich hab nichts anderes tun können als fortgehen. Mittags hat es dann doch Fischsalat gegeben mit mehr Kartoffeln als Fisch.

Jedenfalls sind wir das rote Biest losgeworden. Aber glaub ja keiner, daß das besser gewesen ist. Die Kleinen sind durch die Gärten gelaufen und haben immer nach der Katze gerufen, und die Mutter hat jeden Abend ein Schälchen mit Milch vor die Tür gestellt, und sie hat mich vorwurfsvoll angeschaut. Und da hab ich selber angefangen, in allen Winkeln nach dem Vieh zu suchen, es hätte ja irgendwo krank oder tot liegen können. Aber nach drei Tagen war die Katze wieder da. Sie hat gehinkt und hat eine Wunde am Bein gehabt, am rechten Vorderbein, das war von meinem Scheit. Die Mutter hat sie verbunden, und sie hat ihr auch was zu fressen gegeben. Von da an ist sie jeden Tag gekommen. Es hat keine Mahlzeit gegeben ohne das rote Vieh, und keiner von uns hat irgendwas vor ihm verheimlichen können. Kaum hat man was gegessen, so ist sie schon dagesessen und hat einen angestarrt. Und alle haben wir ihr gegeben, was sie hat haben wollen, ich auch. Obwohl ich wütend war.

のいる池があった。僕は釣竿を持ってはいなかったが、二本の尖った釘のつている棒を持っており、それでもって魚を刺して取るのだ。僕は今まで、しばしば幸運に恵まれたが、今回もまたそうであった。まだ十時にもなっていなかったが、昼食には十分な素晴らしい奴を二匹捕まえた。僕は大急ぎでとってかえし、魚を調理台の上においた。急いで地下室へ降りて行き、洗濯日で仕事中の母に魚を取ったことを話した。母はすぐに一緒に上ってきたが、調理台の上には魚は一匹しかいなかった。しかも、よりによって小さい方だった。そして、窓枠の上になんと赤い猫が座って、最後の一口を食っていたのだ。僕は非常に腹が立って、薪を猫に投つけた。それはまだも猫に命中した。猫は窓枠から転げ落ち、袋を落したようなドスンという音が庭で聞こえた。僕は「さてさて、これで奴も懲りただろう。」と云ったら、母から平手打ちが飛んできた。でも、ピシャリと音がしただけだった。僕は十三歳だが、確か五年位前から平手打ちはもう貰ったことはなかった。「動物いじめ！」と母は叫んで、怒りで真青だった。僕はその場を立ち去るしかなかった。それでも、昼食は魚サラダだった。魚よりジャガイモの方が多かったが…。

ともかく、僕達は赤い猫を危介払いした。しかし、その方が良かったとは誰も思っていなかった。ちびたちは庭をくまなく探しまわり、しきりに猫を呼んだ、そして母は毎晩扉の前にミルクの入った深皿をおいてやった。そして、僕を咎めるような目つきでじっと見た。しまいには、僕自身も隅ずみまで探し始めた。猫はもうどこかで病気か、あるいは、もう死んでしまったかも知れないと思ったからだ。しかし、猫は三日後、ひょっこり戻ってきた。猫は足をひきずっており、それは僕が投つけた薪によって右前足に傷を負ったのだった。母はそれに包帯をしてやり、その上、食べ物を与えた。それからずっと、猫は毎日やってきた。食事の時はいつもこの赤毛の畜生がいなかったことはなかった。僕達のだれも奴に何か食べる物を隠すことはできなかった。僕達が食べようとするやいなや、もうそばに座って、そして僕達のだれかをじろじろ見つめるのだった。僕たちはみんなで奴が欲しがるものをなんでも与えた。僕もみんなと同じように。はらわたが煮えくり返る思いだったにもかかわらずだ。（次号に続く）